

神がくださるパン

(ヨハネ6・34〜40)

一、ヨハネの福音書を探る

きょう開いておりますヨハネの福音書6章には、主イエスが、男たちの数で5千人、女性と子供たちを含めたら1万5千人になるであろう人々に、5つのパンと2匹の魚から、満腹するまで食べさせられたという、奇跡の出来事が書かれています。人々は興奮して、イエスを自分たちの王にしようとししました。すると主イエスは、一人で山に退かれました。夕方になって、弟子たちは自分たちだけで舟に乗り込み、ガリラヤ湖の対岸のカペナウムに向かいました。すると主イエスが湖の上を歩いて来られたので、弟子たちは恐れましたが、イエスは舟に乗り、一行はカペナウムに着きました。翌日、群衆は、それぞれに小舟に乗り込んでカペナウムに向かいました。そして、25節に彼らが、すなわち群衆が、「先生、いつここにおいでになったのですか」と語ったと、書かれています。

きょう開きました6章34節から40節の記述は、カペナウムでの出来事の続きになります。不思議なのは、イエスに語っていた人々は、イエスを追い求めてきた群衆だったのですが、41節に

なりますと「ユダヤ人は」と書かれていることです。群衆がいつの間にかユダヤ人に変わっています。ヨハネの福音書における「ユダヤ人」は、主イエス・キリストに敵対する人々、教会に敵対する人々の意味で使われていることです。さらに59節には、これが、イエスがカペナウムで教えられたとき、会堂で話されたことである。」とあり、主イエスがカペナウムで語られたという語られたという話が、実はカペナウムの会堂(シナゴグ)で語られたという展開になっているわけです。そういうわけで、ヨハネの福音書は、登場人物や場所が次々に替わって行くという傾向を持っています。

二、神に求めるもの

34節を見てまいります。「そこで、彼らはイエスに言った。「主よ、そのパンをいつも私たちに与えください。」とあります。主イエスの時代、人々の糧であるパンは、当たり前にはありませんでした。おおよそ、人々は空腹であったと思われま。そういう状況において主イエスは、人々にパンをたらふく食べさせられました。人々はたいへんに喜びました。ですが、神である主が、人々に悟ってほしいと望まれたのは、人は神の口から出ることばによって養われることでした。申命記8章にありますように、**「2〜3あなたの神、主が**

この四十年の間、荒野であなたを歩ませられたすべての道を覚えていなければならぬ。(略)それは、人はパンだけで生きるのではなく、人は主の御口から出るすべてのことばで生きるということを、あなたに分からせるためであった。」です。神の子主イエス・キリストも、もちろんそのことを思っておられました。そして語られたのが、35節です。「イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことがありません。」と。主イエス御自身が、神からもたらされたパンであるということ。神からもたらされた糧と言い換えてもかまいません。

三、ヨハネにおける聖餐

最後に、余談的なことをお語りしたいと思います。ヨハネの福音書には、いろいろな不思議があります。ニコデモに対して語られていたことばが、いつのまにかユダヤ人全般になっていたりとか、イエスに語っていた群衆が、いつの間にかイエスに敵対する「ユダヤ人」になっていたりと、不思議です。そういうヨハネの福音書には、次のような不思議もあります。それは、聖餐式のことと書かれていないことです。マルコの福音書、マタイの福音書、ルカの福音書、「コリント人への手紙第一」には、主イ

エスが十字架にかかれる前の晩に、弟子たちと過越の食事をなさったことが書かれています。それは一日早い過越の祭りの食事でした。ヨハネの福音書にも、13章から17章まで、主イエスが弟子たちと過越の食事をなさったことが記され、そこで語られた教え、また祈りが書かれています。しかしマルコ、マタイ、ルカ、「コリント」のように、過越の食事が聖餐式の基になったことは記されていません。ヨハネは、聖餐式のことを認めなかったのでしょうか。いえ、実は、書いてあるのです。それが、きょう開きましたヨハネの福音書6章です。53節、54節を、ご覧ください。「イエスは彼らに言われた。「まことに、私の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っていきます。」とあります。聖餐式は、教会が誕生した当時から、洗礼式と並んでたいせつにされてきました。主イエスは十字架にかかれる以前に、御自身が十字架上で裂かれる体をあらわすパンを食べ、流される血をあらわすぶどう酒を飲むことの必要を語っておられました。そう考えますと、聖餐式の起源は過越の食事よりも前であったという、ヨハネの福音書が語るメッセージに出会うわけです。